

要 約

[研究目的]

在宅高齢者を看取る家族を支援した訪問看護師は、在宅高齢者を看取る家族への支援について、どのような看護観を持っているのか探求した。

[研究方法]

研究デザインはインタビューによる質的記述的研究である。研究協力者は、訪問看護ステーションに勤務しており、訪問看護における高齢者看護の経験が3年以上、在宅高齢者を看取る家族を支援した経験がある訪問看護師8名であった。データ収集期間は2005年6月から12月までであった。半構成的インタビューを用いてデータ収集をし、質的記述的にインタビューの内容を分析した。

[結果]

1. 在宅高齢者を看取る家族を支援した訪問看護師の看護観は『人として家族に寄り添いともにあること』であり、その目指すものと支援、必要なものに特徴づけることができた。訪問看護師は『人として家族に寄り添いともにあること』で、家族と体験をともにする存在として居ることが家族にとっての近づきやすさとなり、家族の支えになっていくという見方をしていた。
2. 訪問看護師は【高齢者の長い暮らしの終わりを家族とともに支える】【残された家族のそれからの〈生きる糧〉の獲得を支える】ことを目指し、【家族の本当の思いを日々の暮らしの中から探索する】【家族の思いが叶うように日々の介護が続けられる状況に導く】【〈家族の看取り〉ができるように安心を提供する】ことを支援の要と考えていた。その一方で、人としての関係性を育みながらの支援は【家族により近づく親近感と訪問看護師としてあることの調和をとる】必要性を生じさせていた。
3. 【高齢者の長い暮らしの終わりを家族とともに支える】【残された家族のそれからの〈生きる糧〉の獲得を支える】の2つは家族の支援が目指すものとして位置づけられた。訪問看護師は、高齢者の長い暮らしの終わり、高齢者の人生がまっとうできるような看取りを成し遂げることが、残された家族の肯定感となり、また、できるだけ後悔しない介護や看取りをしたという家族の満足感が、家族のそれからの〈生きる糧〉に繋がっていくと考えていた。訪問看護師は、家族の歴史を捉

えながら、現在の状況の中で家族を支援するという時間枠を超えて、看取り後の家族のそれからの〈生きる糧〉の獲得を視野に入れて支援していた。

4. 【家族の本当の思いを日々の暮らしの中から探索する】【家族の思いが叶うように日々の介護が続けられる状況に導く】【〈家族の看取り〉ができるように安心を提供する】の3つは重要な家族支援として位置づけられた。家族の本当の思いは高齢者の看取りへの原動力となっている。しかしながら、家族の本当の思いは、その人の内面に秘められたものであり、訪問看護師は家族の思いをつかむ意図的な関わりが必要であると考えていた。そして、家族の思いが叶うように、日々の介護が続けられる状況に導き、安心を提供することが〈家族の看取り〉の可能性を切り開いていくことになると考えていた。
5. 【家族により近づく親近感と訪問看護師としてあることの調和をとる】は家族の支援に必要なものとして位置づけられた。訪問看護師は、人としての関係性を維持しながら家族を支援する一方で、訪問看護師としての立場の保持、家族の個人的な問題という立ち入ることのできない一線と家族の望む距離感にも配慮していた。それは、家族が主体性と客観性を保ちながら高齢者を看取り、看取り後も家族が自分の生活へのステップを踏み出せるように配慮したものであった。また、人として家族の思いに添っていくことは、専門職としての訪問看護師の葛藤になるため、訪問看護師は、内面的調和を保つことで専門職としての圧力を家族に加えないように支援し、家族との関係性を構築していた。

[考察]

『人として家族に寄り添いともにあること』は、家族の人生の一部をなす存在となって支援していくことであり、家族に安心感を提供すると考えられた。そして、訪問看護師が家族の本当の思いを探索し、叶えようとする日々の関わりは、家族の介護や看取りへの満足感に繋がることから重要である。また、訪問看護師は、人として、専門職としての家族との距離感をつかむことで、家族の主体性と客観性を支え、さらに、家族との関係性を築く。訪問看護師は、在宅高齢者を看取る家族を支援した経験により、家族を背景にみるのではなく家族の人生を視野に入れて支援するという看護観を育てていった。このような看護観は、家族の長い歴史の織り込まれた生活に入り込んで継続して関わるという訪問看護の形態により培われたと考えることができる。